慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	神道講座の發刊
Sub Title	
Author	淺子, 勝二郎(Asako, Shojiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.3 (1929. 11) ,p.179(501)- 180(502)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291100-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

極度に疲勞せし一行は、横臥する間もなく再び亂徒の襲擊に會ひ、苦戰の結果數名の死者を後にし、辛じて濟物浦に逃るゝを得たり、かくて一行は南陽灣附近の海底測定に從事し居りし、英國測量船フライング・フイシュ號に救助せられ、艦長ホスキン氏の義俠的慮意により、長崎に歸着するを得たり。

かくして京城に於ける不慮の突發事變の變報一度外務省に電申せらるゝや、朝野を震動し、その驚愕憤激は名狀すべからざる有樣にて、議論沸騰し征韓論を唱ふるものすら起れり、又新聞・錦繪・芝居は遭難を描寫報導し、公使以下の勇敢なる行動を激賞せり。

廟議の結果は井上外務卿を下關に派遣し、公使に與ふるに我が政府の談判の方針並に訓條・內訓條・內訓狀を以て强固に抗議を申込みぬ、その結果花房公使以下數氏の再渡鮮となり兎に角平和の中に十五年の朝鮮事變は解決せしなり。

最後に堀本氏以下當時漢城の地にて殉難せられし諸氏の英靈を敬慰すると同時にいさゝか本書の內容を紹介し以て筆を擱く。（昭和四、十、卅一　宇宿捷）

神道講座の發刊

近來往々一部人士の間に思想國難の聲を聞くのであるが、この語の思想內容に付ては、常に疑を懷いてゐる一人である。といふのは、それは外來思想を以て悉く危險視すべきものとなす、口吻を多分に窺はしむるものがあるからである。

外來思想が果して危險であるかどうかは姑く別問題としても、それを危險視する前に、虛心坦懷、その合理、不合理を批判する餘裕はないものであらうか。

私一個人としては、思想そのものに於てよりは、むしろその思想に對する吾々の態度に、より多くの危險性があるのではなからうかと思ふ。

思ふに思想が思想である限り、思想として理解せられなければならないと同時に、それが吾々の實生活を指導するためには、一定の民族性若しくは社會組織に對して、合則的な適應關係を有せしめなければならない。

この兩者の綜合にこそ眞の意味の健全なる國民思想は求められるのではあるまいか。

要するに、抽象的な理論と吾々の實生活との具體的な關聯交渉に於ける吾々の態度に外ならない。（この際鋭い內面的自己反省を要することは勿論である）。

最近の思想に對する取扱は、單に理論に走り、演繹に偏し斯る反省と、それに由て來る歸納的態度を缺ける點に遺憾があるのではなからうか。

自國に對する無理解は之に導く直接の原因であらうと思ふ。

こゝに於て國民道德の淵源であり、精神生活の基調であるわが神道に付て正しい知識を得るといふ事はたしかに無意義ではない。

今回の「神道講座」は（幸ひ講師として斯界の權威を網羅し得たと思はれる）讀むべき書である。安んじて江湖に推薦し得ると思ふ。

（昭二）

ふ。（巢鴨宮下神道攻究會會費月一圓五十錢）（淺子勝二郎）

雜誌「鄉土」

長野縣上伊那郡伊那富小學校に教鞭を執らるゝ諸氏に依つて鄉土研究が續けられ、その立派な成果が毎號の「鄉土」として發行せらるゝことは、寔に世人の注目に價する所である。抑も、鄉土研究は近來俄かに擡頭し來來つた學界の一傾向であつて、本誌も亦、斯かる氣運に促がされた結果であることはいふまでもない。學問は、遠くロシヤやドイツにその鑛臺を求めなくても、研究すべき材料は實はすぐ足許にある。藝術的陶醉もよし、哲學的思索も亦可なりである。けれども、我等が生れ、育ち來つた鄉土そのものの本體を知ることは、一層緊要なことであつて、それは同時に鄉土人の任務であるとは、少くとも本誌同人諸氏の主張の一部分であらう。「鄉土」がその目的を達する爲に、考古學・民間傳承學・人文地理學・地質學などの諸方面の方法を借り來つたのは當然であつて、各方面の研究者が、是等の學問に對する深い理解を、遺憾なく活用してゐらるゝ點に敬意を表せざるを得ない。以て天下に訴ふべき研究も二三に止まらない。祖先の遺した懷かしい傳承の固定されてゐるのもうれしい。純然たる歷史研究もある。斯くて卷を重ね號を追つて遂に目的は達せらるべきである。多くの學術雜誌が經營困難に陷つてゐる時期である。謄寫を活版にすることは望み難からうが、篤志の人を見つけて既刊の分だけでも一括して固定せられんことを希望する。妄評を敢てした。されど寬大なる同人諸氏はこれを恕されるであらう。（有賀春雄）

補修會津白虎隊十九士傳（宗川虎次著　山川健次郎補修）

著者宗川虎次氏の父君は、明治戊辰の役に、開城當時砲兵二番隊の隊長たり、また兄君は白虎隊に屬せざりしも、十七を最期として此の役に戰死せる勇士なりと本書に見える。著者が白虎隊十九士に、最も篤き同情を寄せらるゝも故なしとしない。此の十九士傳は、著者宗川氏が、明治十一年の頃より、遺族數家と、白虎隊生存者數氏とを歷訪して、「苟も十九士の關係より生ずる談話は、涙と共に聽き流すに忍びず、隨つて聽き隨つて筆し、十九士を網羅」したものである。一人々々の勇士に就き、その生立、爲人、逸話、奮戰振りなどを詳細に記し、讀者をして感激なき能はざらしめる。著者の如き人を得ざれば、そのまゝ葬られ去るべき性質の口碑を、暢達なる文章を以て整然と錄し上げ、十九士の俤を永く後世に傳ふべき、著者の功績は多大である。

附錄なる會津白虎隊のこと及び老人殉難者は、共に山川男の編述にかゝり、前者は飯盛山に自刄せる十九士以外の白虎隊士三十一人の最期、及び白虎隊に屬せざる十七歲以下十四歲以上の戰死者に就き詳細に記して、十九士傳を補ひ、後者は此の役の殉難者中、特に高齡を以て壯烈なる最期をなしたる者を錄するもの、同じく本書の附錄として載せられたる莊田三平氏の殉節婦人の事蹟と共に、眞に本書の附錄として相應しいものである。（有賀春雄）